

「博物館にまた来よう」と思っていたくために

— 目と手で覚える学芸員の[芸] —

東京国立博物館研究員

川村 佳男

110 期博前史



学芸員は、日本の博物館に必要なのでしょうか。

学芸員を目指す学生の皆さんにとっては、いきなりショッキングな問いかけかもしれません。しかし、最近そんなことが世間の一部で話し合われているようです。

おしなべて、美術館を含めた博物館は厳しい現実と直面しています。有名な美術館が収蔵品の一部を売りに出した、などという話はここ数年、珍しくなくなりました。国立でさえ、作品の購入・修理予算や学芸員は減る一方です。ある国立の美術館は、自前の収蔵品を一切もたず、もっぱら他館などから借用してきた作品だけを陳列します。その館の英語名は、「THE NATIONAL ART CENTER」です。国立美術館でありながら「THE NATIONAL ART MUSEUM」を名乗らない事情は、よく分かりません。しかし、収蔵品のないことと関係していると考えるのは、うがち過ぎでしょうか。要するに、収蔵品を減らすかなくすことでその購入・修理費を抑え、さらには収蔵品を取り扱う学芸員の人件費まで極力減らそうとする動きが、程度の差こそあれ、全国の博物館で進められているのです。いわゆる、合理化です。

しかし、現状を嘆いてばかりもいられません。この試練の時期に、どのような活路を拓くのか。今ほど学芸員の力量が問われる時期も、そうないでしょう。

新しいリピーターの獲得にこそ、博物館の生命線があると私は考えています。

勤務する東京国立博物館の展示場に足を運ぶと、いつも気になることがあります。お客様の年齢層が、おしなべて高い。対照的に、子供や親子連れが少ないのです。しかも、リピーターはかなり勉強熱心な方が多い。なかには、学芸員もたじろいでしまうくらい高度なご質問を寄せてくださる方もいらっしゃいます。良くも悪くも、全体として東博は“大人の博物館”、しかも熱心なファンに支えら

れた“大人の博物館”なのです。

これからの東博が開拓すべきお客様の層は、明らかです。もちろん、従来のお客様も大切にしなければなりません。しかし、勉強のために通ってくださる熱心な方は、全体からみて一定の割合を超えるものではないうえに、年齢が高めの方が多いのです。むしろ館全体としての目線は、既存のファン以外のお客様を意識して設定しない限り、東博にまた来ようと思っただきのお客様の数は、これから先細りすることでしょう。

館内でも、そのことは議論されています。展示の内容と関連させながら、教育普及課が企画・運営する体験学習や教育講座は、おかげさまで好評です。しかしながら、これまで関心のなかった方を引きつける仕事は、教育普及課だけに任せておけば済む話ではありません。リピーターの新規獲得は、博物館全体の将来にかかわる総合的な戦略として、もっと踏みこんで検討されてもよいくらいです。その危機感があれば、学芸員はもっと有効に教育普及課と連携できるでしょうし、展示解説の書き方や話し方などにも、改善の余地があることに気がつくことでしょう。難しい専門用語で作品を語るのには、意外と楽なのです。勉強さえすれば、ボランティアの方にもできます。しかし、興味のない方や子供にも、魅力や面白さや驚きを少しでも感じてもらうように易しく作品を語るのが、本当のプロフェッショナルだと思うのです。

学芸員を志す人は、もとより研究者です。学芸の「学」は、放っておいても自分で進めるでしょう。しかし、専門家でない方を相手に作品を語ることを含めた「芸」については、一筋縄ではいきません。この「芸」は、話術など小手先のことだけでは身につけません。何度も何度も、頭だけでなく、その目と手を使ってじっくり作品に向かいます。すると、その作者や過去の所有者のとどめた痕跡が、作品の知られていなかった魅力や秘密などについて、打ち明けてくれることがあります。しかし、残された手がかりは、とても小さくて不明瞭なものです。それを逃さないようにするためには、日頃から収蔵品と向き合い、目と手の感覚を繊細に研ぎ澄ましておかねばなりません。その経験の積み重ねなくして作品を語ろうにも、相手の心に響く言葉は生まれて来ないでしょう。しかし、それが出来たとき、なぜ博物館には借り物ではなく、自前の収蔵品が必要なのか。さらには、なぜそこに学芸員が必要なのかを、もっと広く世間に分かってもらえるのではないのでしょうか。そして、博物館が敷居の高い“知の殿堂”ではなく、誰もが楽しめる“智の遊び場”である、ということも。

※写真 ギャラリートーク風景

